

『そばかすの少年』におけるヒロイン像の再解釈

— 「夢の乙女」を脱構築する Swamp Angel —

Reconsideration of the Angelic Heroine Image in *Freckles*:
Swamp Angel Reconstructs an Archetypal Character of “Les Filles de Rêve”

清水 友理*

Yuri SHIMIZU

要約 本稿は、ジーン・ストラトン・ポーター (Gene Stratton-Porter, 1863-1924) の『そばかすの少年』 (*Freckles* 1904) のヒロイン像の再解釈を試みるものである。先行研究において、本作のヒロイン、エンゼル (Angel) は西洋文化における男性の理想としての女性像である、「夢の乙女」 (Les Filles de Rêve) を踏襲したキャラクターとみなされてきた。これに対し本稿では、ヒロインにつけられた「沼地のエンゼル」 (Swamp Angel) の名前に着目し、主人公の立場からみたエンゼル像と実際のエンゼルを比較することで、エンゼルが典型的な「夢の乙女」とは異なる要素を内包し、さらに「夢の乙女」になることを自ら選択する点で、こうした女性像を払拭していると示した。エンゼルにみられる、男性に幻視される存在でありながら、実は女性自身はその立場になることを自ら選択しているという「夢の乙女」の脱構築は、「夢の乙女」像の研究、特に女性作家の描いた「夢の乙女」という点について重要な視座である。

キーワード : ジーン・ストラトン・ポーター, 少女小説, 夢の乙女, 主体性, 家庭の天使

Abstract The purpose of this article is to explore another way of reading an image of the heroine of *Freckles* written by Gene Stratton-Porter. In previous studies, the heroine, Angel, has been regarded as just an archetypal character of “Les Filles de Rêve,” which is the ideal image of women in Western culture. By focusing on the heroine’s name, “Swamp Angel,” and comparing her image from the hero’s point of view with the actual herself, this work will describe how Angel has elements unlike the stereotype of “Les Filles de Rêve.” Angel chooses to become hero’s ideal woman herself, pushing aside the representative characters of “Les Filles de Rêve.” In other words, the deconstruction of “Les Filles de Rêve” seen in Angel is an important perspective in research on the ideal image of women, and especially that depicted by female artists.

Key words : Gene Stratton-Porter, Girl’s Stories, Les Filles de Rêve, Subjectivity, Angel in the House

はじめに

アメリカの作家、ジーン・ストラトン・ポーター (Gene Stratton-Porter 1863-1924) の『そばかすの少年』 (*Freckles* 1904) は、片腕のない孤児の少年そば

かす (*Freckles*) が、リンバロスト (Limberlost) の森で番人として働くなかで自己を探求する孤児物語 (注 1) である。本作は出版当初から古典的なロマンス (注 2) と評価され、姉妹作の『リンバロストの乙女』 (*A Girl of the Limberlost* 1909) と同様、少女向けの作品 (注 3) として読まれてきた。

そばかすは鳥との交流を通して森に愛着を覚え、誠実な人柄で周囲の信頼も得る。しかし己の出自を知らないそばかすは、心の底で愛に飢えており、自

* 日本女子大学大学院 人間生活学研究科 人間発達学専攻
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science, Japan Women’s University

己を構築しきれずにいた。そんな彼に愛を与え、リンバロストこそ己の居場所だと実感させたのが、森で出会った少女、エンゼル (Angel) であった。

このエンゼルは、姉妹編の『リンバロストの乙女』で、そばかすと結婚し、良き妻、母となる。従来の研究においてエンゼルは、姉妹編の主人公のロールモデルの1人として、“the archetypal angel in the house”¹⁾に該当すると分析されてきた。たとえば青嶋由美子は、「母親のような優しさや逞しさで、そばかすを支え続けるヒロイン」²⁾と評している。けれどもこうしたエンゼル像は、続編で妻、母となった彼女を前提としたもので、本作のエンゼルに焦点を当てた研究は殆どない。その背景には、『リンバロストの乙女』が20世紀初頭の英語圏少女小説の代表格(注4)とされるのに対し、『そばかすの少年』はその関連作として言及されるのみで、単独で評価されることがあまりなかったことが考えられる。

しかし『そばかすの少年』のエンゼルは本当に単なる「家庭の天使」(Angel in the House)なのだろうか。確かに彼女は、優美な容姿と気品に、親しみやすく家庭的な性格を備えた、まさに天使のような少女である。だがその一方で、彼女のキャラクター像には単なる「家庭の天使」と言い切れない点が3つある。1つは、彼女は作中で一貫してエンゼルと呼ばれるが、それが本名でなくそばかすにつけられた愛称である点だ。これは、そばかす彼女を自身の理想の体現として崇拝していることを意味する。2つは、彼女が作中で天使のようだとされる一方、実際の行動にはそれに反するものが多々みられる点だ。彼女は銃を使って泥棒を撃退し、そばかすを救うため泥棒の首領をだましすらする。3つは、物語終盤、重傷を負ったそばかすが身分違いの恋を憂いて死のうとした際、エンゼルが彼に自分を与えることと自ら決めて、行動を起こす点だ。彼女が彼の高貴な出自をつきとめて、2人は結ばれる。このようにエンゼルは、天使のような理想の存在として崇拝されながら、それとは異なる面を内包している。さらに終盤では、そばかすを愛すると決め、彼の天使になる道を自ら選ぶという主体的な選択すらしてみせる興味深いキャラクターなのだ。

これは言い換えれば、本作のエンゼルは男性の理想としての天使のような女性像である、「夢の乙女」(Les Filles de Rêve)を踏襲しながら、それと異なる

要素を内包し、単に男性から理想の存在として幻視されるのではなく、実は彼女自身も「夢の乙女」の立場になることを自ら選択している点で、こうした女性像を脱構築したと評価できるのではないか。これを証明し、本作に新たな価値を付与するため、本稿では以下のことを行う。まずエンゼルが「夢の乙女」像を踏襲していることを、作品内における彼女の評判から示す。またそばかすの自己探求における彼女の役割を、彼がつけた「沼地のエンゼル」(Swamp Angel)の愛称から提示する。次にエンゼルの行動を取り上げ、彼女が自身の行動に対する主体性を有する点で、単なる天使のような少女と一線を画すことを明らかにする。加えて、作中や先行研究において彼女のこのような面がなぜ重視されてこなかったのか、その理由を考察する。さらに物語終盤のエンゼルの行動が、皆に愛される天使からそばかすの「夢の乙女」になることを選んだ彼女の主体的な選択であることを示し、これを証明する。

1. そばかすからみた「夢の乙女」エンゼル

はじめにでも述べたように、先行研究においてエンゼルは、ヴィクトリア朝期における理想の女性像である「家庭の天使」の典型だとされてきた。確かにエンゼルは、美しい容姿と気品に、浮浪児に手作りの飲み物を振る舞い、炊事もこなす家庭的な面を備えている。そんな彼女は“a born lady”³⁾と慕われて、多くの男性から憧れられている。その信奉者の数と熱意は、彼女の父が懇意にする店の従業員が“Even the scrub-boy of this establishment would fight for her.”⁴⁾と言うほどだ。ここからエンゼルは、いずれ「家庭の天使」になるにあたって求められる要素を既に備えているが、より正確に言えば、男性の崇拝対象としての天使のような女性像である、「夢の乙女」に該当するキャラクターと考えられる。

「夢の乙女」とは、アラン・コルバン (Alain Corbin) が様々な作品における乙女像から提示した、西洋文化において共通する男性の永年の理想としての女性像である。小倉孝則はこれを、「美、慎ましさ、やさしさ、美德、純潔をすべて具えた女であり、男たち、とりわけ青年たちが理想化し、時として天使のような相貌を付与してしまう」⁵⁾存在と述べる。コルバンは、「夢の乙女」は西洋文化において強い影響力を有し、「男性の恋の想像力を織りなすのに力を貸し、女性には身ごなしやふるまいのモデルを

提供してきた」⁶⁾と述べる。また『屋根裏の狂女』(*The Mad Woman in the Attic* 1979)でも、男性作家の理想の女性は、“always an angel”⁷⁾と指摘されている。つまり「夢の乙女」は、男性の理想としての天使のような女性の根源的なイメージなのだ。

そばかすにとってのエンゼルも、まさに「夢の乙女」である。実際、本作の登場人物紹介にもエンゼルは“Freckles’ Sweetest Dream Materializes”⁸⁾とある。だがここからはまた別のことも読みとれる。それは、彼にとって彼女は単なる憧れの対象というだけでなく、彼の理想を体現した存在でもあるということだ。これは、ジョゼフ・キャンベル (Joseph Campbell) が提示した神話や民話における自己探求のパターン、「英雄の旅」(Hero’s Journey)における「女神」(Goddess)の役割と一致する。キャンベルは、英雄の旅において女神は、主人公の「約束された理想の化身」⁹⁾であり、「この世やあの世での探索が目指す、至福を授ける目標」¹⁰⁾だと述べる。つまりそばかすにとってエンゼルは、憧れの対象であると同時に、自己探求の旅の到達点でもあるのだ。このことは、彼が彼女につけた「沼地のエンゼル」という愛称にも表出している。

「沼地のエンゼル」は、そばかすがエンゼルと初めて森で出会ったとき、彼が彼女につけた愛称だ。エンゼルを一目みたそばかすは、彼女の“beauty of which Freckles never had dreamed”¹¹⁾に圧倒されながらも、“in every way kin to the Limberlost”¹²⁾と感じる。そして彼女が名乗ろうとするのをさえぎり、“There’s nothing you could be but the Swamp Angel.”¹³⁾と呼びかける。これ以後、そばかすは彼女を常にエンゼルと呼び、彼女の本名が明かされることはない。この「沼地のエンゼル」という名前には、次の2つの意味があると考えられる。1つは、“Swamp Angel”という言葉自体の意味だ。これは『オックスフォード英語辞書』(*Oxford English Dictionary*)の“swamp, n”の項に記載されている。その定義は“n. U.S. a name for the hermit thrush and the wood thrush”で、1871年には“quite a rare bird... in the deepest and most remote forests, usually in damp and swampy localities”¹⁴⁾を意味する語として北米で使用されていたことが分かる。つまりそばかすは、彼女を深い森の沼地でしか見られない貴重な鳥にたとえているのだ。2つは、そばかすにとってリンバロストの森の鳥が帯びる意味合いだ。これは一言で言うと天使、

すなわちリンバロストの森からの恩寵を意味する。その所以は本作のキーワードでもある(注5)、「舞い降りた羽根」(Falling Feather)にある。

「舞い降りた羽根」とは、そばかすが森番の仕事に慣れた頃、彼の前に降りてきた一枚の黒い羽根のことである。そばかすはこの羽根の持ち主の鳥を“black angel”¹⁵⁾と名付け、彼らについて色々なことを知りたいと思うようになり、本を買って学ぶことを考え付く。このように、そばかすは一枚の羽根をきっかけにリンバロストにおける自分の世界を広げていく。この羽根は、その章題、“Wherein A Feather Falls And A Soul Is Born”¹⁶⁾が示すように、作中でも彼の自己探求の開始として描かれている。さらに彼自身も“Biggest streak of luck I ever had... through only a falling feather.”¹⁷⁾と言うように、この羽根を自分に幸運をもたらす存在と捉えている。つまり彼にとって、黒い羽根はリンバロストの森の恩寵の証であり、その持ち主の森の鳥は彼を幸運へと導く天使なのだ。

またそばかすはエンゼルとの出会いをもたらしたのも、この羽根だと考えている。彼はエンゼルとの出会いを次のように感謝している。[“T]hank You for each separate good thing that has come to me... and above all for the falling of the feather. For if it didn’t really fall from an angel, its falling brought an Angel”¹⁸⁾この言葉からは、そばかすが彼女をリンバロストの森の恩寵の「天使」としてみていることが分かる。「沼地のエンゼル」の名前は、いわばその象徴である。言い換えれば彼のエンゼルへの愛は、リンバロストにおける自己探求の道そのものなのだ。このことは、終盤でエンゼルと結ばれ、彼女と共にリンバロストで生きると決めたときのそばかすの言葉からも読みとれる。それは次のようなものであった。[“M]y heart’s all me Swamp Angel’s, and me love is all hers, and I have her and the swamp so confused in me mind I never can be separating them”¹⁹⁾これを決意したとき、エンゼルから彼に一枚の黒い羽根が贈られる。そばかすにとって「沼地のエンゼル」からその象徴の黒い羽根を与えられるのは、リンバロストにおける自己探求の達成、すなわちアイデンティティの所在の決定を意味する。

以上をまとめると本作のエンゼルは、男性の崇拜対象としての天使のような女性像、「夢の乙女」を踏襲したキャラクターである。そして主人公のそば

かすにとっては自身の理想の体現であり、自己探求の旅の到達点である。言い換えればこの物語においてエンゼルの主人公がたどり着くべき場所であり、受動的な立場にあると言える。けれども作中での彼女の行動には、こうしたイメージに反するものも多々みられる。

2. 「夢の乙女」と一線を画すエンゼル

本項では、エンゼルの具体的な行動をいくつか取り上げ、彼女が自身の行動に対する主体性を有する点で、単なる天使のような少女とは一線を画すことを明らかにする。また作品内や先行研究において、エンゼルのこうした面がなぜあまりクローズアップされてこなかったのか、その理由を考察する。

先にも述べたように、作中でのエンゼルの行動には天使のような少女という評判とは矛盾しているように見えるものも多くある。彼女は確かに美しく家庭的だが、それと同時に非常に活発で、おてんばと言えるようなことも、次々とやってのける。エンゼルはリンバロストの森を自由に歩き回り、ガラガラ蛇も怖がらない。また生き物の写真を撮ることもでき、馬や自転車も乗りこなす。

彼女のこうした行動のなかでも際立っていると考えられるのが、次の2つである。1つは、材木泥棒と遭遇した際、銃を使いこなし彼らを撃退したことだ。2つは、泥棒からそばかすを助けるため、首領のブラックジャック (Black Jack) をだましたことだ。もちろんこれらの行動は、どちらも泥棒との対決という緊急の事態においてのものである。しかし重要なのは、このような局面においてエンゼルが、単に天使のような自分の存在によりそばかすを鼓舞するのではなく、自ら状況を判断し、主体的に行動した結果、難を脱している点だ。たとえばエンゼルが銃を撃つ場面は、次のように描写される。

Black Jack straightened, uttering a fearful oath. The hat sailed from his head from the far northeast. The Angel had not waited for the Bird Woman and her shot scarcely could have been called high.... Freckles looked at her in surprise. Her eyes were black, while her face was a deeper rose than usual. He felt that his own was white. "Did I shoot high enough?"²¹⁾

このときエンゼルは、そばかすよりも冷静に銃を使い、弾を撃ちこむタイミングも自ら計っている。つまりエンゼルには自ら状況を判断して適切な行動を選択する能力、言い換えれば、自身の行動に対する主体性が備わっているのだ。

またブラックジャックをだます場面においては、天使のような自分自身を武器として利用すらしてみせる。エンゼルはそばかすを捕まえた泥棒たちに“angelic sweetness of the men”²¹⁾な態度で声をかける。そして首領ブラックジャックに目をとめると、その魅力を讃え、自分に馬に乗った雄姿を見せてくれないかと頼む。するとたちまちジャックは彼女の虜になってしまう。

Jack leaned toward her. He was the charmed fluttering bird, while the Angel was the snake.

“Well, I rather guess!” he cried.

The Angel drew a deep breath and surveyed him rapturously.

“My, but you're tall!” she commented.²²⁾

このときの彼女の天使のような笑顔や、うっとりとした様子は、無意識の自然なものでなく、ブラックジャックを信用させるため意識的に装われたものだ。これは引用で、エンゼルが蛇に、ブラックジャックが鳥にたとえられていることから、明らかである。もちろん彼女のこの行為は、そばかすを救出するという目的に必要と考えられる行動を選択したゆえのことだ。加えて、これは次項で詳しく述べるが、このときのエンゼルはまだ異性愛に目覚めておらず、異性に対する影響力も理解していない子どもとして描かれているため、彼女に魔性的な側面があるとは言い切れない。けれどもこのときのエンゼルは天使というより、男性を破滅させる誘惑者としての女性、「宿命の女」(Femme Fatale)の気配を漂わせている。このようにエンゼルは、天使のようでありながら、自身の行動に対する主体性を備えており、ときにそうしたイメージからかけ離れた行動をとる点で、単なる天使のような少女とは一線を画している。

ただし、ここまで述べてきたエンゼルの天使らしからぬ側面は、けして彼女の「夢の乙女」という立場をそこなうものではない。実際、作中ではエンゼルが「夢の乙女」を逸脱するような行動を取るたび、登場人物たち、特に彼女を「沼地のエンゼル」

と崇拜するそばかすによって、こうした印象が是正されることがある。たとえばエンゼルがガラガラ蛇も恐れないという点は、彼女が生き物を信頼する証であり、“The one characteristic an Irishman admires in a woman, above all others, is courage.”²³⁾と説明される。そばかすもこの話を聞き、彼女を“worship”²⁴⁾する気持ちを強める。またエンゼルがブラックジャックをだます場面も、そばかすからみれば、彼が彼女を自身の「沼地のエンゼル」として本当に信頼しているか、その真義を問う試練に置き換わっている。

Was he dead or alive? Since his Angel had seen Black Jack she never had glanced his way. Was she completely bewitched? . . . Suddenly a thing she had said jestingly to him one day came back with startling force: “You must take Angels on trust.” Of course, you must! She was his Angel. She must have seen! His life, and what was far more, her own, was in her hands. There was nothing he could do but trust her.²⁵⁾

そばかすは、エンゼルがブラックジャックに魅了されてしまったのではないかと絶望するが、すぐ彼女の「エンゼルを信じなさい」という言葉を思い出す。そして彼女への信頼を取り戻した結果、彼女に救出される。これらを踏まえると、エンゼルは明らかに「夢の乙女」と異なる要素を内包し、そうしたイメージに反する行動をとるにもかかわらず、常に「夢の乙女」としてみられているために、その立場を逸脱することはないキャラクターと言える。

このようなエンゼルの位置づけは、従来の研究における彼女の評価についても同様だと考えられる。実際、エンゼルが天使のような少女でありながら、活発な面も備えているということは、先行研究において全く指摘されてこなかったわけではない。たとえば青嶋は、エンゼルは「フロンティア時代の女性のような逞しさを持つと同時に、非常に優しく人を思いやる気持ち」²⁶⁾も持つと述べる。またアンジェラ・ブラジル (Angela Brazil 1868-1947) の『学校のおてんば娘』(The Madcap of the School 1917) では、銃を使いこなして男の子を守るエンゼルは、寄宿学校の少女たちの憧れの物語のヒロインであり、“promoting exciting models of girlhood freedom”²⁷⁾と

して描かれている。さらにローレンス・ジェイ・デスナーは (Laurence Jay Dessner) は、こうしたエンゼルの活動範囲の広さを、次のように評する。

The Angel is in many ways well ahead of her time as a model of a woman's making and taking for herself a sphere wider than the domestic realm to which stereotyped gender roles restricted most women of her time and place.²⁸⁾

ただしデスナーは、エンゼルが最終的にはそばかすと結婚して、その活動の場が家庭の範囲に留まることから、彼女のこうした面は時代のステレオタイプに挑戦するものではなく、少女時代の一過性の自由にすぎないと結論づける。これは、20世紀初頭の児童文学におけるヒロインの活動範囲の限界、“The child heroine is destined to develop into a mother”²⁹⁾とも一致する。

以上をまとめると、エンゼルが単なる天使のような少女とは異なる要素を内包していることは明らかであり、そうした面は作品内でも、先行研究においてもある程度は認められている。だがその一方でエンゼルは、物語上では常にそばかすに崇拜されるヒロインであり、「夢の乙女」の立場を完全に逸脱することはない。また研究においても、最終的には「家庭の天使」におさまる点から、このような側面が重視されなかったことが考えられる。

しかしここで1つの疑問を呈する。確かにエンゼルは、物語においてはそばかすの「夢の乙女」であり、最終的には「家庭の天使」になるという意味では、受動的かもしれない。けれどもエンゼルには、本項で指摘したように自身の行動に対する主体性が備わっている。そうした性質を持つ彼女が、片腕がなく、出自も分からないそばかすを愛して、彼と結ばれるにあたって、彼女の主体的な意志がともなっていないと解釈するのは、むしろ不自然ではないだろうか。次項では、物語終盤のエンゼルの行動が、皆に愛される天使からそばかすの「夢の乙女」になる道を選んだ彼女の主体的な選択であることを、彼に対する彼女の気持ちの変化から明らかにする。そして本作のエンゼルは、単に男性から理想の存在として幻視されるのではなく、実は彼女自身も「夢の乙女」の立場になることを自ら選択しているという点で、「夢の乙女」像を脱構築したと示す。

3. 「夢の乙女」を脱構築するエンゼル

エンゼルはそばかすと出会ってから、泥棒をめぐって何度か窮地を共にし、ときには自らを危険にさらして彼を助けた。こうした経緯を踏まえると、物語の終盤、エンゼルが彼女をかばって大木の下敷きになったそばかすを救出するため尽力するのは、ごく自然な流れであると思われる。しかしこの最後の救出劇は、エンゼルにとってそれまでのものとは異なる意味合いがある。なぜなら、ここで彼女のそばかすへの想いが友情から異性愛に変化することで、彼女は「子ども」から「女性」に成長し、皆に愛される天使からそばかすだけの「夢の乙女」へ変わるからだ。これを明らかにするには、まず、そもそも2人の関係について見直す必要がある。

そばかすとエンゼルの関係について重要な点は、出会った瞬間から彼は彼女を女性として意識しているにもかかわらず、その想いを積極的には伝えようとしないことである。実際そばかすはエンゼルと接するときは常に“if he lifted them the tumult of tender adoration in them would show and frighten her”³⁰⁾と感じ、想いを隠そうとしている。その背景には、そばかすがエンゼルを性愛の対象として認識する反面、彼女自身のことはまだ子どもで、異性を愛する領域には達していないとみていることがある。これはそばかすだけでなく、彼の父親代わりで材木会社の支配人のマクリーン (McLean) や、エンゼルの保護者役のバードレディ (Bird Lady) も同様である。このことは、エンゼルがそばかすの歌に感激して彼にキスしたのを目撃した2人のやりとりからも窺える。

“Do you think the Angel knew she did that?” she asked softly.

“No,” said McLean; “I do not. But the poor boy knew it. Heaven help him!”

... “He was born a gentleman,” conceded the Bird Woman. “He took no advantage. He never even offered to touch her. Whatever that kiss meant to him, he recognized that it was the loving impulse of a child under stress of strong emotion.”³¹⁾

ここで2人は、そばかすはエンゼルへの想いを恋愛感情だと自覚しているが、エンゼルはまだ異性愛に

目覚めておらず、自身がそばかすに対しどれほど影響力をもつのかにも無自覚だと述べている。つまりエンゼルは、多くの男性から好意を寄せられているが、まだ異性を愛することを知らないという意味では「子ども」として描かれているのだ。

そんなエンゼルのそばかすへの子どもらしい好意が異性を思うものへと変化したきっかけは、彼女が彼女をかばって大木の下敷きになったことだ。このとき重傷を負ったそばかすは、彼女への身分違いの想いを憂いて、“I can't for the life of me be telling you, but indade, it's best to be letting me go.”³²⁾と言って死のうとするが、エンゼルは彼の言葉には耳を貸さず、彼を病院へ連れていく。この時点では、彼女はそばかすの想いを知らずに、ただ彼の命を救おうと必死なだけだ。しかし瀕死のそばかすの看病をするうちに、彼女に明らかに変化が生じる。それは次のようなものであった。

Three days later she was the same Angel as of old, except that Freckles was constantly in her thoughts. The anxiety and responsibility that she felt for his condition had bred in her a touch of womanliness and authority that was new.³³⁾

そばかすという特定の男性に心を配りつづけたことで、エンゼルにそれまでにはなかった女らしさと威厳が芽生え始める。これは彼女のそばかすへの気持ち、子どもの純粋な好意から異性への愛情に変化し始めたことの表れである。多くの男性に崇拜されながらもまだ「子ども」の領域にいたエンゼルは、このときから明確に「女性」として描かれるようになる。そしてそばかすの想いを知ったとき、エンゼルの彼への想いの方向性も決定的なものとなる。

そばかすの秘められた想いをエンゼルに伝えたのは、彼の父親代わりのマクリーンだ。手術が成功してもそばかすは、エンゼルへの想いに苦しむあまり、生死の境をさまよっていた。そうした彼の気持ちを熟知していたマクリーンは、エンゼルがそのことに気づかないまま、彼を助けようとしていることに憤り、ついにそばかすが求めているものが彼女の愛だと、エンゼルに告げてしまう。

“That he will never say,” said McLean at last, “and you don't understand, Angel. I don't know how you

came here. I wouldn't have had you hear that for the world, but since you have, dear girl, you must be told that it isn't your friendship or your kindness Freckles wants; it is your love.”³⁴⁾

けれどもマクリーンのこの言葉に対し、既に「女性」の領域に足を踏み入れたエンゼルは “Well, I do love him.”³⁵⁾ だと言り返す。そして彼女がまだ異性愛を理解していないと食い下がる彼に、さらに次のように言っただけのける。

“I never have had to dream of love,”... “I never have known anything else, in all my life, but to love every one and to have every one love me. And there never has been anyone so dear as Freckles. If you will remember, we have been through a good deal together. I do love Freckles, just as I say I do. I don't know anything about the love of sweethearts, but I love him with all the love in my heart, and I think that will satisfy him.”³⁶⁾

注目すべき点は、エンゼルが、愛に対するそれまでの自身の無知を認めつつも、そばかすへの感情はほかの人々へのものとは異なると、自ら分析し、宣言したことである。言い換えれば、ここでエンゼルは、片腕もない、出自も分からないそばかすへの愛を自覚し、彼を自身の特別な存在とすることを決意していると言える。このようにして彼への想いを明らかにしたエンゼルは、病床のそばかすに “I want you to be my real knight”³⁷⁾ と自ら告白する。この告白は、エンゼルが誰からも愛される天使のような自分から、そばかすに愛し愛される、彼だけの「夢の乙女」になる道を自ら歩みだしたことを意味している。

けれどもその道のりは彼女が予想していた以上に前途多難であった。というのも、エンゼルが本当の意味でそばかすの「夢の乙女」になるには、つまり単に崇拜されるのではなく現実的に結ばれるためには、そばかす自身が自分を彼女にふさわしい人間だと思ふ必要があるからだ。実際、エンゼルが想いを告白しても、そばかすは出自すらも分からない自分には、彼女をもらう資格はないと断る。それはエンゼルが彼を “you are the very finest person I ever knew”³⁸⁾ と言い、そうした点こそ、彼が立派な家の出身である証拠だと言っても変わらなかった。

“But you can't prove it,” wailed Freckles. “It ain't giving me a name, or me honor!”

“Freckles,” said the Angel sternly, “you are unreasonable! Why, I *did* prove every word I said! Everything proves it! You look here! If you knew for sure that I could give you a name and your honor, and prove to you that your mother did love you, why, then, would you just go to breathing like perpetual motion and hang on for dear life and get well?”³⁹⁾

このときエンゼルは説得を受け入れないそばかすに、自分が彼の出自を確かめて自身の考えが正しいこと、つまり彼には彼女と結ばれる資格があることを証明すると、彼に挑みかかる。この後、実際にエンゼルはそばかすの出自を探り、彼がアイルランドの貴族の出身であることをつきとめ、2人が結ばれることが可能だと証明する。このようにそばかすとエンゼルの2人は、そばかすの意志や行動ではなく、エンゼルが彼を愛すると決め、彼の「夢の乙女」になるべく行動した結果、結ばれる。つまり2人の関係を進展させる主導権を掌握しているのは、そばかすではなく、本来は「夢の乙女」という受動的な立場にいるはずのエンゼルなのだ。そしてその進展を可能にしたのは、そばかすだけの「夢の乙女」になる道を選択した、彼女の主体的な意志にほかならない。

このことは、第1項でも言及したそばかすにエンゼルから贈られた黒い羽根にも明示されている。先にも述べたように、そばかすにとって自身の「沼地のエンゼル」である彼女から贈られた羽根は、リンバロストにおける自己探求の達成を意味する。けれどもエンゼルの立場からみれば、この黒い羽根を贈る行為は、彼女が彼の「夢の乙女」である「沼地のエンゼル」に自らなったことの象徴と言える。実際、そばかすがリンバロストの恩寵だと考える3つのもの、つまり「舞い降りた羽根」、「沼地のエンゼル」、そして「黒い羽根」のなかで、最後の1つは明らかに性質を異にする。というのも最後の羽根だけは、エンゼルという贈り手が存在するからだ。彼女は “To the Limberlost Guard!”⁴⁰⁾ の宛て名を書いた箱に羽根を入れて彼に贈る。このように、「沼地のエンゼル」の象徴の黒い羽根をリンバロストの森番のそばかすに贈ることにより、彼女は名実ともに、彼の「夢の乙女」となる。そして結婚し、妻、母となり、

一家の「家庭の天使」として君臨する。それは彼女の影響力や活動範囲の限界を示すものではなく、彼女の選択の結果であり、主体的な意志によって獲得したもののなのだ。

以上をまとめるとエンゼルは、登場時から天使のような少女と評され、主人公にも「夢の乙女」とみなされているが、最終的にその位置を確かなものにしたのは、彼を愛し、彼だけの「夢の乙女」になることを決めた彼女の主体的な選択であった。言い換えれば『そばかすの少年』のエンゼルは、単に主人公のたどり着く場所として存在するのではなく、さらに理想の存在として幻視されている少女自身が、実はそうした立場になることを自ら選び取っているという点で、「夢の乙女」像を脱構築したと言える。

おわりに

本稿では、従来『リンバロストの乙女』の関連作品として扱われてきた『そばかすの少年』に新たな価値を付与することを目標に、本作のヒロイン、エンゼルは単なる「家庭の天使」の典型ではないのではないかという仮説をもとに、キャラクター像の再評価を試みた。その結果、以下の3つのことが分かった。1つは、エンゼルは一見すると男性の永年の理想としての女性像である「夢の乙女」の典型にみえることだ。彼女は天使のような少女と評され、物語においては主人公そばかすの自己探求における到達点として機能する。2つは、だがその一方でエンゼルには、従来の「夢の乙女」とは異なる要素が内包されていること、特に自身の行動に対する主体性が備わっているということだ。もっとも物語において彼女はあくまで「夢の乙女」としてみられており、その立場を逸脱することはない。3つは、けれどもエンゼルは、単に主人公がたどり着くべき場所としてのみ存在するのではなく、彼女自身もそうした立場になることを自ら選択するという点で、従来の「夢の乙女」とは一線を画すことだ。

以上をまとめると、『そばかすの少年』のエンゼルは典型的な幻視される存在としての「夢の乙女」を踏襲しながらも、それとは異なる要素を内包し、単に男性から理想の存在として幻視されるのではなく、実は彼女自身も「夢の乙女」の立場になることを自ら選択しているという点で、こうした女性像を脱構築したと評価することができる。このエンゼル像は、『そばかすの少年』に対し、特に「夢の乙女」

の表象研究において、新たな価値を付与するものである。というのも、「夢の乙女」を提唱したコルバンの研究には、実は女性作家の作品が全く検討されていないという重要な余地がある。このことは小倉孝誠も「女性作家のエクリチュールにおいても、男性は「夢の女」を幻視し続けるのか、それともそのような幻想は払拭されているのか、その問題は考察に値する」⁴¹⁾と指摘する。本稿で見出したエンゼル像は、まさにこの疑問に対し1つの答えを与えるものである。つまり、女性作家であるポーターが描いた「夢の乙女」エンゼルは、そばかすの目線からみた幻視される存在としての「夢の乙女」であると同時に、「夢の乙女」とは異なる面を内包する1人の少女エンゼルが、自らその幻視される立場になることを選ぶ姿を描いた点で、これを払拭してもいるのだ。これは「夢の乙女」像の研究において、重要な視座である。

加えて、本稿において『そばかすの少年』がこうした研究に新たな視座を提供できると示したことは、ジーン・ストラトン・ポーター、さらに同じく少女小説作家として評価されてきた多くの同時代の女性作家を、西洋文明において形成されてきた男性目線の女性像を、解体、再構築し、刷新した存在として再評価すべき根拠であり、少女小説において描かれた女性像の研究のさらなる重要性と新たな可能性を提示するものである。

<注>

注1) たたとえば鶴澤は、本作を「ちょっとひねった結末」⁴²⁾を持つものの、孤児物語の典型である貴種流離譚のパターンを踏襲した作品と評する。

注2) たたとえば出版当時のニューヨークタイムスの書評では、“takes most of its spirit from old-fashioned romance”⁴³⁾と評されている。

注3) 本作は、アンジェラ・ブラジルの『学校のおてんば娘』やテネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams 1911-83) の『ガラスの少女像』(Portrait of a Girl in Glass 1943)において、登場する少女の愛読書として描かれている。

注4) 『リンバロストの乙女』は“a popular girl's story”⁴⁴⁾と評されるほか、『アンジェラ、あんたって本当にいかすねえ!』(You are Brick,

Angela! : A New Look at Girl's Fiction from 1839-1975 (1976) でも、20 世紀初頭の北米の少女小説の代表格の 1 つとして取り上げられている。

注 5) 本作の当初の題は『舞い降りた羽根』であったが、出版にあたって結末を書きかえたとき、変更されたことが当時の書評で紹介されている。

<引用文献>

- 1) Ford, Elizabeth. "How to Cocoon a Butterfly: Mother and Daughter in *A Girl of The Limberlost*." *Children's Literature Association*, vol.18, no.4, Winter, pp.148-153, 152, (1993)
- 2) 青嶋由美子「リンバロストの台所から (2)」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』(豊橋創造大学短期大学部) vol.28, pp.1-15, 1,(2011)
- 3) Porter, Gene Stratton. *Freckles*. 1904. Dover Publications, 225, (2017)
- 4) 前掲 3), 129
- 5) コルバン, アラン『処女崇拜の系譜』山田登世子, 小倉孝誠訳, 藤原書店, 193, (2018)
- 6) 前掲 5), 189
- 7) Gilbert, Sandra M, and Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*. Yale UP, 20, (1979)
- 8) 前掲 3), vi
- 9) キャンベル, ジョゼフ『千の顔をもつ英雄 上新訳版』, 倉田真木, 斎藤静代, 関根光宏訳, 早川書房, 166, (2015)
- 10) 同上
- 11) 前掲 3), 77
- 12) 同上
- 13) 前掲 3), 85
- 14) "swamp, n." OED Online, Oxford UP, March 2020, www.oed.com/view/Entry/195405. Accessed 24 May 2020.
- 15) 前掲 3), 39
- 16) 前掲 3), 26
- 17) 前掲 3), 44
- 18) 前掲 3), 92
- 19) 前掲 3), 290
- 20) 前掲 3), 104-06
- 21) 前掲 3), 166
- 22) 前掲 3), 168
- 23) 前掲 3), 80
- 24) 同上
- 25) 前掲 3), 168-69
- 26) 前掲 2), 3
- 27) Foster, Shirley, and Simons Judy. *What Katy read: Feminist Re-Readings of 'Classic' Stories for Girls*. Macmillan, 199, (1994)
- 28) Dessner, Laurence Jay. "Class, Gender, and Sexuality in Gene Stratton-Porter's *Freckles*." *Language and Literature*. vol.36, no.2, Spring, pp.139-157, 148, (2000)
- 29) Alston, Ann. *The Family in English Children's Literature*. Routledge, 44, (2008)
- 30) 前掲 3), 122
- 31) 前掲 3), 143-44
- 32) 前掲 3), 235
- 33) 前掲 3), 239
- 34) 前掲 3), 242
- 35) 同上
- 36) 前掲 3), 243
- 37) 前掲 3), 245
- 38) 同上
- 39) 前掲 3), 251
- 40) 前掲 3), 290
- 41) 前掲 5), 206
- 42) 改訂版企画編集委員会/鶴澤文子「孤児物語」『英語圏諸国の児童文学 I 「改訂版」—物語ジャンルと歴史—』, 日本イギリス児童文学会編, ミネルヴァ書房, pp.73-78, 74, (2013)
- 43) "The Timber-Guard's Paradise," review of *Freckles*, *New York Times Book Review*, 3 December p.839 (1904)
- 44) Hahn, Daniel. *The Oxford Companion to Children's Literature*. 2nd ed. Oxford UP, 230, (2015)

(指導教員：川端有子教授)